

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
おやいづまちこ 小柳津町子	女性	89歳 H27.8.15 現在	19歳	一鍬田

「目の前で爆弾が ～ 豊川海軍工廠」

私は、昭和17年（1942年）4月に豊橋のタイピスト専門学校に入学し、同年9月30日に同校を卒業しました。そして翌日の10月1日には、豊川海軍工廠の火工部検査事務所のタイピストとして配属されました。

海軍工廠は、航空機や艦船などが装備する機銃や弾丸などの主力生産工場として建設され、昭和14年12月に開庁された巨大兵器工場です。動員された勤労学徒6千人を含め、5万人以上の人々が日本の勝利を信じて働いていました。

私は、野田から海軍工廠への専用列車で通っていました。男女別の6両編成で、電車はいつもすし詰めでしたが、当時は工廠内（西豊川駅）まで行くことができました。工廠には、地元をはじめ青森や長野など国内各地から大勢の人たちが働きに来てみえました。火工部検査事務所は正門近くにあり、仕切りのある部屋には中枢部として士官さん達が20人ほど居られました。福永中佐が主任でした。私の仕事は、文書や秘密、極秘密等を打つことでした。一字まちがえても大変なことになる暗号文書などもあり、とても神経を使う大事な任務でした。

昭和20年（1945年）8月7日、突然現れたB29の編隊によって、爆弾、焼夷弾などの直撃を受けて工廠は壊滅状態となってしまいました。

空襲警報と同時に「本退避」の命令が下されました。私は班長さんについて正門に向かって走りました。ふと見上げると、3機編隊のB29の「ウォンウォン」という爆音がします。長丸い形の爆弾が降りかかってくるのが見えます。目の前に爆弾が落ち、私は間一髪で防空壕に飛び込みました。大きな音とともに地震のように地面が揺れました。私の先を走っていた班長さんたちは消えてしまいました。こっぴみじんに吹き飛ばされたのだと思います。私は必死に防空ずきんをかぶり、目と鼻をふさぎ、耳をおさえました。防空壕の中は暗くて何も見えませんが、半分埋もりかかっていたのか、「助けてくれー、助けてくれー」「痛いよー、痛いよー」と、うめき声が奥から聞こえてきます。でも、とても助けることはできません。体はふるえ、生きた心地はしません。

少し静かになったので、恐る恐る目を開けてみると、まわりは火の海、真っ黒い煙、弾丸がパンパンはぜる音がします。どちらへ行けばよいのか方角さえも分からないまま這い出しました。よく見ると、血だらけで倒れている人や手足をもぎ取られた人、内臓が飛び出ですでに亡くなった人が目に入りました。爆風で吹

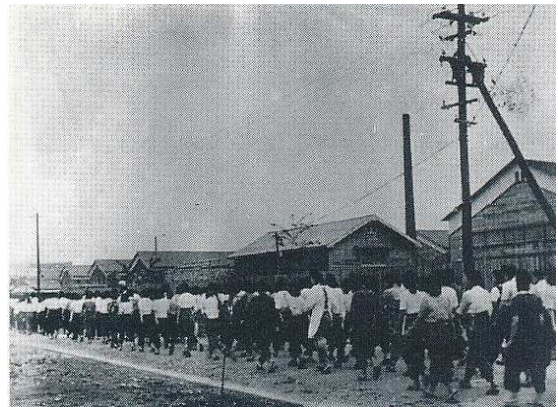
き飛んだ自転車やら落ちてきたものやら、爆弾の大きな穴、人の死体などで普通には走れず、這ったり伏せたりして進みました。その間にも「ドーン！」と、ものすごい音と地ひびきがします。泣いて助けを求める人もいましたが、自分も逃げるのが精いっぱいでも手を貸すことはできませんでした。

やっと廠外へ出ると、今度は小型の艦載機が降下してきてパンパンと撃ってきました。あわてて畑に入ったり、道路で死んだふりをしたりしました。敵機が去るの待って、豊川の方へ向かって歩きました。工廠は真っ暗い煙と火の海でした。

豊川駅の近くまで来ると、駅前の旅館では屋根の火の粉をバケツで水をかけて消していました。私はひたすら一宮の方角へ向かって家路を急ぎました。

やっとの思いで野田の家にとどり着くと夕方になっていました。両親は、私がもう生きてはいないと諦めかけていたようです。裸足で泥まみれの私を見て、「よく助かったなあ。」と喜んでくれました。

ふしぎなことに弁当を抱えて持ち帰っていました。せつかく持ち帰った弁当です。食べようと開けてびっくり、ご飯はいたみ、赤土色で砂だらけ、とても食べられるようなものではありませんでした。



通勤風景：豊川海軍工廠資料集より

焼け野原で見たこと、聞いたこと

3日後に後片づけに工廠に行きました。廠内はひどい匂いが充満し、焼け野原で建物もなくなっていました。悲しくて力が抜けてしまいました。馬が腹を出して死んでいましたが、まだ片づけられずにいました。亡くなった人は、戸板やタンカ、リヤカーで3ヶ所へ運ばれて土葬されたそうです。昼ににぎりめしが出ましたが、気持ちが悪くてとても食べられませんでした。死者を調べていた警察官の人は、服についた死臭がとれずに困ったという話を聞きました。

私と同じ事務所にいた学徒動員の人も亡くなりました。豊橋高等家政女学校の田村さんという子です。出席簿のようなファイルを抱えたまま血まみれになって死んだと聞きました。機銃部にいた一畝田の小柳津秋代さんと藤原好子さんは、手をつないで逃げたそうです。小柳津さんは近くに落ちた爆風で着ていた服も飛ばされ、血だらけではらわたが飛び出て亡くなったそうです。手をつないでいた藤原さんも顔に大きな怪我をされました。藤原さんは、その時のことは思い出したくないと、今でも誰にも話をされていないそうです。

空襲であんな恐ろしいことになるとは想像もできませんでした。もう二度と戦争をやっちはいけません。1週間後の15日に終戦となりましたが、もう少し早く終戦になったら、多くの人々が亡くならず済んだのに、と思いました。